



薫小だより

「気づき・考え・行動する 薫の子」



郡山市立薫小学校

学校便り No. 4

令和6年 4月26日

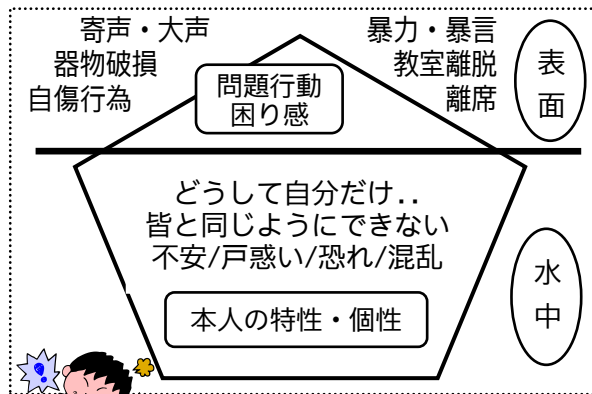
文責：校長 齋藤和彦

特別支援教育の考え方について 「その対象者は全ての児童生徒です」

特別支援教育というと、何か特殊な感じを受けますが、その対象者は学校の全ての児童生徒です。例えば、視力が悪ければメガネやコンタクトを使います。耳が聞こえにくければ補聴器を使います。メガネや補聴器を使う人は特殊な人ではありません。

今、子どもが困っている状態から、生活しやすく・学びやすいようにするのが特別支援教育です。（下の図をご覧ください）

一般に「氷山理論」と言われるモデルです。



声を発することや教室を飛び出すことは度々見られ、問題行動として捉えられます。しかし、大声を出して先生に注意されたい子ども、教室を飛び出して先生に叱られたい子どもはいません。

大声なんか出したいくないけど、出してしまふのは、子どもの心のSOSです。

その背景には、常に不安や戸惑いがある、やむにやまねずの行動となっているのです。

一般に言われる「問題行動」を起こす子どもの背景を探り、支援策を講ずるには、保護者と学校との連携（関係機関も）が必要です。

【本当に怖いのは二次障がいです】

問題行動を注意され叱られ続けると、子どもの自己肯定感は下がり、「どうせ僕なんか..」「私ばかり叱られる..」と、二次障がいに陥り、無気力になり、さらに問題行動は複雑化します。そこから自己肯定感を回復させるには長い時間がかかります。そうなる前に適切な支援を行いたいのです。

※ ここまで..宮城小学校 伊藤孝行校長先生の資料を引用させていただきました。

お子さんのことで、ご心配なことがございましたら、お気軽に学校へご相談ください。

◆◆ 校長室より (ある..若い臨床心理士をめざす学生さんのお話) ◆◆

なかなか直らない..子どもの「行儀の悪さ」には、「見えない原因」がある。~子どもの「困った行動」を叱っても意味がない ~なぜなら、「見えないところ」にその行動の原因があるかもしれないからです。私たち誰にも発達にそれぞれの凸凹（特性）があります。上記の子どもの場合、この凸凹特性に大きな部分があります。

専門的な検査によって、この凸凹実態を明確にして、その対応策を学校と保護者と専門家（医師や臨床心理士等）で探っていくことが必要です。（対応策の正解はありません。目指すところは、ただただ「困っている子どものために」）

~ある..若い臨床発達心理士をめざす学生さんが、こんなことを言いました。
相談者十数人を抱える、かけだしの嘱託見習いさんでしたが、共感できる..お話でした。

「(~略...) 視覚化された予定表は、本来なら写真や絵でわかるといいけど、少なくとも、色分けされていて、“なんだか今日の予定が楽しいものに見える！”（その子に対する先生の心）ってだけでもいいね。動くたびに何か言われ、ひたすら浴びせかけられる言語指示は、全然わからない中国語で激しくまくし上げられるのと同じ、あるいはそれ以上のストレスと苦痛だよ。そうやって、大人の都合で追い込まれて...みんなチックや行動障がいになって..ああーあ..ってなる。（この状態で相談に来る親さんがいっぱいだよ..）」
「(~略...) 個々の障がいに対応するって、とても大変なことだけど、ときに一緒に困って大事だと思う。悩んで困ってみたいとわからない。ひざすりむいたときの痛さがわからないと、そこに絆創膏貼ってあげるとき、触れ方わからないでしょう？ そーっと痛くないように貼ってあげることできない..って思うんだ。」

この学生さんは、今は臨床心理士となって、保護者（子ども）の相談の傍ら、学校を訪問して歩いています。私たちの研修努力は必要です..が、専門的・的確な実践をすぐに..は、なかなか難しいのです。でも、できることがある。一緒に困ってみる（悩みがわかる）寄り添うってことです。

~いつまでも、一緒に困っていたり、寄り添っているだけでは、素人なのですが...。

誰よりも困っているのは、“子ども”本人です。ここを忘れず、できる限りの力を尽くします。

